近代大阪文化の多角的研究

――文学・言語・映画・国際事情

笹川慶子
日高水穂
森　勇太
増田周子
Michael Cronin　著

関西大学 なにわ大阪研究センター

はじめに

本報告書は、関西大学創立130周年記念特別研究費より助成を受けたプロジェクト「近代大阪文化の多角的研究 ── 文学・言語・映画・国際事情 ──」の研究成果である。プロジェクト期間は2015年4月から2017年3月までの2年間であった。メンバーは関西大学文学部の笹川慶子、日高水穂、増田周子、アメリカのウィリアム・アンド・メアリー大学のマイケル・P・クローニンである（敬称略、姓の昇順）。正式メンバーのほかに関西大学文学部の森勇太も活動に参加した。

活動の主な目的は、世界的な視座から大阪研究を見つめ直すとともに、研究の成果を海外に発信することである。活動内容は大きく3つある。まず1つ目は、月1回ペースでの研究例会の開催である。研究例会では各メンバーが申請書に掲げたテーマに関する研究発表をし、意見交換を行った。文学、言語、映画など異なる分野の研究者が多方向から大阪をテーマに話し合う場をもつことで、様々なメディアを横断する大阪文化が浮かび上がり、大変有意義であった。

2つ目は、研究成果を日本国内はもちろん、日本の外に向けても発表し、その成果を問うことである。各メンバーはアジア研究の国際学会AAS（Association for Asian Studies）や台湾、中国などで研究成果を発表した。また、クローニンは、大阪文化の研究書『オオサカ・モダン（Osaka Modern）』をハーバード大学出版から出版した。英語圏では初めての本格的な大阪文学および文化研究である。

3つ目は、2年間の研究成果を活字化することである。本書がそれにあたる。各メンバーの専門的な知識を土台にした研究成果を論集『近代大阪文化の多角的研究』にまとめた。笹川は台湾における帝国キネマ演芸の映画配給網を明らかにした。日高は大阪発祥の漫才の寄席演芸化について「ボケ」「ツッコミ」の用語が定着していくプロセスから考察した。増田は知られざる昭和大阪の文士劇「風流座」の活動及び一次資料を発掘した。マイケルはアメリカ合衆国の主要な日本研究機関における大阪関連書籍の所蔵を調査した。森は東西落語の文末表現の変遷とメディアの関係に言語学的側面から光を当てて考察した。それぞれ文学、言語、映画、海外事情といった様々な方向から大阪を読み直した、大変興味深い論文である。

大阪は、中央の東京に対する最も強力な地方という位置づけ以上の、多様で多彩な世界都市である。本書がそのことを示す一助になればと願っている。

最後に、プロジェクトを代表して、なにわ大阪研究センター、とくにスタッフの方々に、お礼を申しあげたい。また、本プロジェクトの基盤となる研究にご支援いただいた旧大阪都市遺産研究センターの大谷渡先生と薮田貫先生、そして個人的には、私を大阪研究に導いてくださった早稲田大学名誉教授の鳥越文蔵先生、一緒に研究してくださった多くの方々にお礼を申しあげたい。

2017年3月7日

笹 川 慶 子

目　次

はじめに …… i

帝国日本の映画配給
——台北の帝国キネマ演芸と西日本—— …… 笹 川 慶 子 …… 1

漫才の賢愚二役の名称と役割の変容
——「ツッコミ」「ボケ」が定着するまで—— …… 日 高 水 穂 …… 17

文学作品との比較から見た落語のことば
——行為指示表現から見た近代大阪方言—— …… 森　　勇 太 …… 33

昭和大阪の文士劇「風流座」第一回公演 …… 増 田 周 子 …… 45

アメリカ大学図書館における日本関連蔵書に関する報告
——ハーバード大学とメリーランド大学を中心に—— …… マイケル・クローニン …… 69

著者プロフィール …… 73